

第10回千曲川中流域砂礫河原保全再生検討会 議事要旨

1. 開催日時：令和2年10月1日(木) 14:00～16:00
2. 場 所：千曲市河川事務所2階 大会議室
3. 出席者：平林座長、島野委員、豊田委員、笠原委員、北野委員、瀬崎委員、傳田委員、吉川委員（矢口代理）、仙波委員（小林代理）、小林委員（萩原代理）、竹内委員、大井委員、藤澤委員、吉池委員、松田委員、依田委員、齋藤委員（浮田代理）
(欠席無し、Web参加含む)

【配付資料】

- ・ 次第
- ・ 出席者および座席図
- ・ 資料－1 これまでの検討結果の概要について
- ・ 資料－2 令和元年度出水後の状況について
- ・ 資料－3 モニタリング調査について
- ・ 資料－4 今年度施工箇所の概要について
- ・ 資料－5 今後の予定

4.議事概要（凡例：「◇」事務局からの連絡、「＊」質疑、「→」回答、「☆」意見）

1)資料1 これまでの検討結果の概要について
特に無し

2)資料2 令和元年度出水後の状況について
特に無し

3)資料3 モニタリング調査について

＊p.7 冠着地区のH28掘削箇所の形状はどのように設定しているのか。オギが入っているということは、砂やシルトが堆積しているということなので、比高が高くなっており砂礫ではないのではないのか。

→ 掘削形状については、無次元掃流力と冠水頻度に基づいて設定している。オギ群落の箇所については洪水後も細粒分が残っていたと考えられ、施工後の表層土の状態等には注意する必要がある。

☆表層の粒径分布などの河床材料や地形を踏まえた評価を実施することで、掘削による効果をより分かりやすく分析できるのではないかな。

☆砂礫河原再生の効果として注目する種の回復がモニタリングで顕著でないことに対し、改善方策などあれば各委員にお聞きしたい

☆イカルチドリは留鳥であり、ある程度行動範囲や縄張りが固定化されているため、増えるとしても緩やかである。また、草が生えている箇所を嫌うため、砂礫河原の状態と関連しやすい。コチドリは渡り鳥であり、日本に飛来する個体数にも年変動があるため、砂礫河原の面積に対して単純に増えるわけではない。さらに、河川内に営巣適地がない場合には、周辺の農地等を利用する場合もあり、単純には評価できない。

☆中礫が鳥類指標種営巣箇所の代表粒径とされているが、大礫があっても細礫が入り込んでいれば営巣地として利用する場合がある。表層の粒径分布と生態系の関係を分析することが望ましい。

☆植物では、指標種を確認することだけではなく、生育できる「場を作ること」が重要である。掘削を行った場所だけではなく、上流側から種子が供給されることもあり得るため、生態学における「メタ個体群」の視点で、千曲川中流域の環境を評価すべきではないか。出水によって一時的に指標種が確認されなくなることは問題ではなく、メタ個体群として維持されることが重要である。また、H26 施工箇所では外来種のヒメムカシヨモギ群落も H29 出水によって消失しており、外来種が定着しないハビタットが維持されていると評価できる。

☆掘削によって陸上は直接的に影響を受けるが、水域には直接的な影響は生じないと想定される。また、気候条件や出水の状況等による影響を受けるため、評価を行うには時間を要する。一方で、令和元年 10 月出水によって、コクチバス（外来種）の捕獲個体数は減少していると感じている。

◇千曲川では、樹木伐採を予定している。関係者の要望を踏まえながら樹木伐採の計画を立てていきたいので、引き続きご意見・ご協力を頂きたい。

☆埋戻し箇所における濁水のモニタリング調査結果は全国的に見ても珍しい。施工や出水による濁度変化を評価出来たといえる。

☆令和元年 10 月出水による巨大な外力によって砂礫河原が再生しており、自然本来の遷移や種の動態を確認することができる。出水後のモニタリング調査の結果を踏まえ、生態系の指標種を追加しても良いのではないかな。指標種についても検討しながら、総合的に評価する事が重要であると考ええる。

4)資料 4 今年度施工箇所の概要について

☆専門的な部分なので十分な検討の上で実施頂ければ良い。

☆掘削土を埋め戻しすることを考えている。既往事例にあるように、濁りは一時的なものと考えている。懸念点あるいは埋め戻しによるポジティブな効果がないかなど、漁協の意見を伺いたい。

☆令和元年の10月の出水により、河道内の泥の多くが流されたため、出水後の濁度の低下速度が速くなったと感じる。一方で、実際に浦野川（千曲川支川）でも小魚が残っていることを確認しているが、魚類は流されずにある程度残っていると考えられる。砂礫河原も大幅に回復しており、できるだけ現状を維持して頂きたい。対策しなければ、すぐにハリエンジュが再生して元の状態に戻ってしまうことを懸念している。

＊埋め戻しをする際には、深掘れ箇所が魚類の越冬地として利用されていないかを確認するための事前調査や濁水の発生状況を把握するための調査は実施するのか。

→ 古舟橋地区と同様に事前の調査や濁度計を設置した濁水調査の実施を予定している。

☆台風19号出水が作用しても樹木が飛ばなかった箇所は二極化が生じているため、高いところを削り、深いところを埋める、という自然が維持できる河道とすることは自然再生・治水の両面で意義がある。推進して頂きたい。

5)資料5 今後の予定

☆対象箇所の見直し、インパクトレスポンスの把握・積み重ねをするということである。

☆地域協働の視点が入っているので、ご理解・ご協力頂く必要がある。

6)全体を通して

☆養蜂家にとってはニセアカシア（ハリエンジュ）は貴重な蜜原樹であるため、残せるところについては配慮頂きたい。

以上